The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の「はい」の表すもの ー「はい」の機能と韻律的特徴をめぐってー
Author(s)	甲斐, 朋子
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72222
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　甲　斐　朋　子　）	
論文題名	日本語の「はい」の表すもの ――「はい」の機能と韻律的特徴をめぐって――

論文内容の要旨

本研究の目的は，次の2つである。1つは，日本語の「はい」ということばをとりあげ，「はい」がさまざまな機能とともに使われていることを具体的に確認したうえで，「はい」のそれぞれの機能と韻律的特徴との間に見られる関係性を明示することである。もう1つは，会話進行の面から，自然会話における「はい」の会話進行上の機能と韻律的特徴がどのように関わっているのかについての実態を明らかにすることである。

人々が日々行う社会的行為の中で多様な使われ方をすることばの1つに，「はい」ということばがある。日本語の「はい」ということばは，人々の社会的行為のさまざまな場面で使われている。質問や依頼などに対する応答だけでなく，名前を呼ばれたときの返事や，写真を撮る際の掛け声の「はい！チーズ！」など，1つ1つの場面を数え始めたら切りがないほどである。このように多様な用法をもつ「はい」についての研究は，音声，画像の収録機器が普及する以前は，研究者の経験に基づく内省や，小説などの文字化資料を分析の対象とすることが一般的であり，それらをもとに多くの研究がなされてきた。音声，画像の収録機器が普及し，実際の会話における「はい」の使用が分析可能となってからも，「うん」や「ええ」などとともに応答詞やあいづちやなどの研究として取りあげられてきた。会話参加者が「はい」ということばを使うことによって，どのような方法として社会的行為を実践しているかという視点からの研究は，決して多いとは言えない。さらに，そこでの「はい」の韻律的な特徴をあわせて詳しく見ようとする研究は管見ではなさそうである。

社会的行為の実践としての会話の中で，「はい」は質問-応答のような隣接対の後続発話としての機能だけでなく，会話参加者間の人間関係の維持などのバロメーター的な働きも担っていると考える。このバロメーター的な働きは「はい」の韻律面に負うところが大きいと想像される。このような韻律面も含めた「はい」の機能を会話の進行という視点を加えて分析することで，文字情報として伝達されない「はい」の機能を多面的にとらえることができると考える。日本語の「はい」という1つのことばの使用実態を「はい」の機能という視点から分析し，「はい」の主たる性質，韻律的な特徴との関係を可視化し，共有可能なものとして提示することは，社会的行為の実践としての会話の進行における「はい」の機能を明らかにすることにつながる。そして，それは，日本語を母語とする人々が指向する社会的行為の実践の1つの方法を明示することになり，日本語を介して理解を深めようとする人々や，日本語の仕組みを分析する研究領域に対し，実践の具体的な方法の1つを示すことができると考える。このような社会的行為の実践の中で「はい」ということばが，韻律的特徴も含め，どのような機能として使われているかを明らかにすることを試みた。

本論文の構成は以下の通りである。

第1章では，序論として本研究の目的と意義について述べ，本論文の構成を概観した。

第2章では，まず，文法論的な視点から，感動詞や応答詞としての「はい」に関する研究で明らかにされてきたことを整理した。次に，非応答詞の「はい」について，あいづちや談話標識などの，談話の中での働きに注目した研究の中で代表的な研究を取りあげ，会話の進行という面での分析に，どのような知見が得られているかについて検討した。また，これまでの日本語における談話を対象とした韻律研究と，海外における相互行為についての韻律研究についてその手法の違いについて述べた。最後に「はい」を含む感動詞についての音声分析の枠組みを提示した先行研究を取りあげ，本研究における課題について述べた。

第3章では，次の第4章で「はい」の機能と韻律的特徴との関係を調べるにあたり必要となる「はい」の機能について，先行研究の用例をもとに分類を行った。分類に先立ち，「はい」ということばの核となる性質を導き出し，会話の進行という視点から分類を試みた。「はい」の主な機能として，態度表明系統の機能に，あいづち，受入れ表示，肯定応答，聞き返しの4つ，展開制御系統の機能には，注意喚起，区切れ表示の2つの分類を示した。

第4章では，人々が日常的に参照しうる社会的慣習としての「はい」の韻律的特徴（音形：［ˈはˇい］，［ˈはい］

等 ，音の高低レベル・長短）がどのようなものであるのかについて，分析の対象とする複数の「はい」を比較可能な形で明示することを試みた。第3章で分類した6つの機能をもとに，会話場面を設定し，各場面で発話される「はい」の自然さを実験協力者に評価してもらった。そして，「はい」の機能と韻律的特徴である，音形，高さレベル，長さにどのような関係にあるのかを聴取実験によって検証した。結果，「はい」の機能と音形，高さレベル，長さとの関係において，次のことが明らかになった。まず，機能と音形との関係については，固定化した関係ではないが，ある一定の方向性を持った結びつきが見られた。［˘はˇい］型では，あいづち，肯定応答，［˘はい］型では，肯定応答と注意喚起，［↗はい？］型では，聞き返しの機能としての使用が自然性の評価が高かった。次に，高さレベルと機能との関係について，固定化した関係ではないが，2つの側面からの基準により一定の方向性を持つ結びつきが見られた。高さレベルの使い分けの際に，基準となっていたのが，対人態度によるものと，会話進行の機能によるものであった。前者は受入れ表示や聞き返しの場面で見られた。会話の相手との対人関係で求められる真摯な態度などの対人態度を示すための声の高さで，低くない「はい」との結びつきが見られた。もう1つは，注意喚起や，区切れ表示のように，場面の転換の合図や話題の終了地点など，会話を進行していく際に必要な声の高さであった。受入れ表示，注意喚起で低くない「はい」との関係が見られたのに対し，区切れ表示では，低い「はい」との関係が確認された。長さと機能の関係については，両者の間に固定化した関係というのは見られず，ほとんどの機能で，長い「はーい」は短い「はい」に比べ，その自然性の評価が低かった 。すなわち，長さは「はい」の機能にともなう対人態度との結びつきが強い韻律的特徴だと言える。

第5章では，実際の自然会話において進行中の話題が終わりに向かう箇所で観察された「はい」の事例を取りあげた。この章での分析には「会話分析」の手法を援用した。会話の中で，会話参加者がどのような手続きを経て，進行中の話題を終了に至らせているのかを詳細に記述していくことによって，「はい」の担う機能を検討した。ここでは，はじめに，先行研究により明らかにされた教室会話における話題の終了の手続きを概観し，本研究の分析資料で観察された「そうですか」に続く「はい」の連鎖が，進行中の話題を終了に向かわせる１つの方法として使われている事例について分析を行った。本章で取りあげた隣接対の第1発話部を持たない「はい」が，いずれも進行中の話題から次の話題へと移行する場所で見られ，「そうですか/そうなんですか」に始まる発話の連鎖を終了に導く発話連鎖の第３発話部に位置するものであることを示した。そして，進行中の話題の終了から次の話題へと移行していく過程において，「はい」ということばが会話の進行にどのように関わっているのかをターン構成の可視化という方法によって提示した。最後に，3つのタイプの事例から，教室会話だけでなく，日常的会話においても，「はい」がひとまとまりの話題の区切れとなるターンの位置に現れることを明示した。

第5章の後半では，話題を終了に向かわせることが可能なターン構成の同じ位置に現れる「はい」の韻律的特徴に着目した。そして，話題を終了に向かわせることが可能なターン構成の位置的な機能として，ひとまとまりの区切れを示す「はい」が，会話の進行の面では，どのような機能を担っているのかを検討した。検討の結果，話題を終了に向かわせることが可能なターン構成において，位置的な機能として，ひとまとまりの区切れを示す「はい」が，会話の進行の面では，話題の終了提案に対する承認や，会話の本題に関する話題の継続の指向，新しい話題の開始の提示と異なる機能を果たしていることが示唆された。そして，これらの会話の進行における機能は，「はい」の韻律的特徴とともに，「はい」の前後の発話の韻律的特徴とも関係していることも同時に示された。

第6章では，第5章で取りあげた進行中の話題を終わりに向かわせることが可能な一連の発話連鎖（「そうですか」に始まり，「はい」で終わる）を分析の対象とした。一連の発話連鎖の同じターン構成の位置に現れる「はい」の韻律的特徴と，会話進行との関係を明らかにするために，「はい」の音形，高さレベル，長さをさまざまに変えた合成音声を用いて聴取実験を行った。聴取実験により，「発話連鎖を終了に向かわせるのに特化した発話連鎖 」の同じターンの位置に現れる「はい」について，ターンの位置は「ひとまとまりの区切れ」を示す位置にあるが，その音形や高さレベルの違いによって，会話の進行においては異なる機能を担っていることが示された。具体的には，進行中の話題に対して終了感を生じさせやすい「はい」とそうでないもの，「はい」の後続の話題が会話全体を終わりに向かわせる話題が続くように聞こえる「はい」とそうでないものというように，異なる機能を担っていることが明示された。また，第6章の実験では，異なる会話枠による進行中の話題に対する終了感や，後続話題の終了指向感に統計的な有意な差は見られなかったが，［˘はˇい］型の方が，その違いによる影響を受けやすい傾向が見られた。

第7章では，結論として第6章までの分析と考察をまとめ，本研究から得られた知見の意義と今後の課題について述べた。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　甲斐　朋子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	郡　史郎
	副 査　教 授	義永美央子
	副 査　教 授	西口光一

論文審査の結果の要旨

甲斐朋子氏の学位論文は，伝統的に感動詞に分類される日本語の「はい」について，その機能を整理した上で，それが音の高さと長さについてさまざまな特徴を見せながら会話の進行に果たしている様相を詳細に記述し，そこで音声的特徴が担う役割を分析したものである。会話進行の様相の記述には「会話分析」の手法を用い，音声的特徴の分析には音響分析と合成音声の聴取実験という実験的な手法を用いている。

論文の構成は，まず第1章で研究の目的と意義を説明した後，第2章で先行研究を整理して本研究で検討する課題を述べている。そして，第3章で会話の進行という視点から「はい」の機能を，あいづち，受入れ表示，肯定応答，聞き返し（以上は態度表明系統の機能），そして注意喚起，区切れ表示（以上は展開制御系統の機能）の合計6つに分類している。

第4章では音響分析と合成音声を用いた聴取実験を通じて「はい」の機能と音声の特徴の一般的な関係を検討している。ここでは，音形（［「は⌉い］［「はい］［↗はい］），高さレベルと機能の間には固定的ではないが一定の方向性を持った結びつきが見られること，長さは対人態度との結びつきが強いことを述べている。聴取実験の参加者は近畿圏在住の大学生29名と関東在住の社会人11名で，両者の回答傾向に特段の差は見られないと言う。

第5章では，進行中の話題が終了可能な位置にあらわれる「はい」をとりあげ，電話会話における実態を音声の詳細な特徴とともに会話分析の手法を用いて記述している。続く第6章では，第5章で得られた知見にもとづいて，進行中の話題を終了に向かわせることが可能な一連の発話連鎖において，会話進行と「はい」の音声の特徴との関係がどのようなものかを，3つの会話の枠組について合成音声を用いた聴取実験を通じて検討している。ここでは，「はい」の音声の特徴しだいで，進行中の話題に対して終了感を生じさせやすい場合とそうでない場合があること，また，後続の話題が会話全体を終わりに向かわせる話題が続くように聞こえる場合とそうでない場合があること，会話の枠組による違いは下降しない音形の［「はい］よりも下降音形の［「は⌉い］の方で顕著なことが述べられる。

「はい」はきわめて日常的なことばであるにもかかわらず，それが会話においてどのように使われているかについての先行研究は少ない上，「はい」がさまざまに発音されている事実への配慮もなかった。本研究の新規性と重要性は，ひとつには会話における「はい」の働きをその具体的な発音の変異に注目して記述し，社会的行為としての「はい」の使用実態の一端を明らかにした点にある。また，その際に「会話分析」と実験的な音声研究という性格が大きく異なる研究手法を，それぞれの長所を生かす形で併用することに成功しており，それらの点において高い価値を有するものと評価できる。

審査の過程において，第5章以下で検討されたのは第3章で分類された「はい」の機能の一部分であることの指摘があり，また，聴取実験の方法に対する改良の提案もあった。しかし，それらがなくとも論文の目的は十分に達成されており，研究方法論の新規性の高さと結果の重要性についての評価を下げるものではない。

以上から，本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお，チェックツール“iThenticate”を使用し，剽窃，引用漏れ，二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。